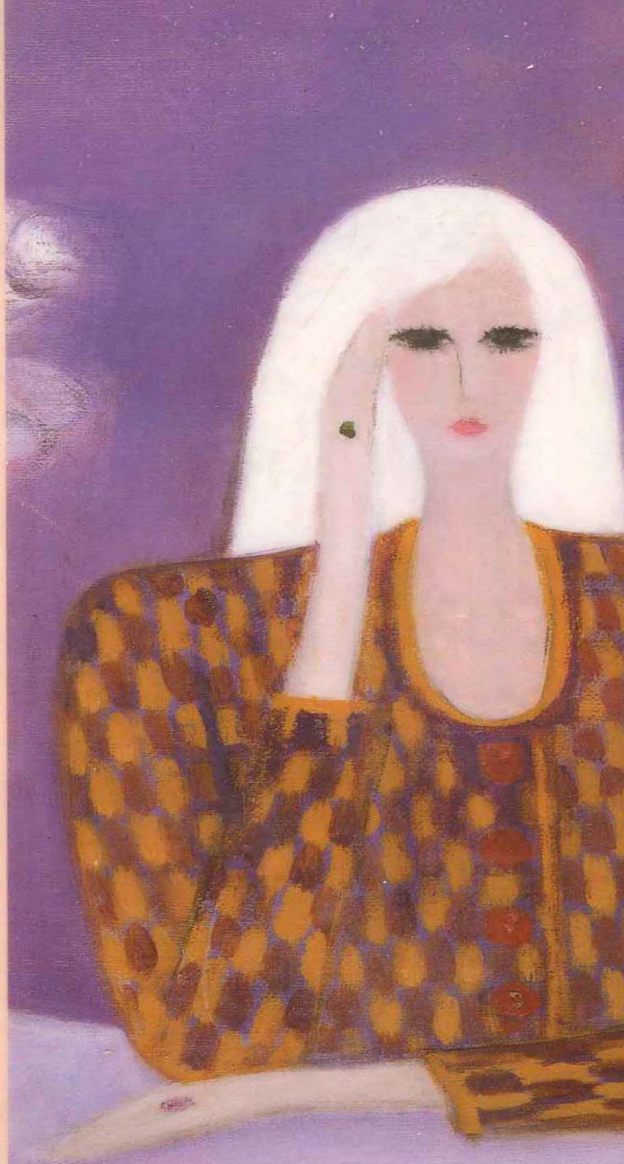


熊野古道殺人事件



C★NOVELS

C・NOVELS

© Yasuo UCHIDA 1991

くまのこどうきつじんじけん
熊野古道殺人事件

1991年11月30日 初版発行

1995年12月20日 9版発行

著者 ^{うちだ やすお} 内田康夫

発行者 嶋中行雄

本文印刷 三見印刷
カバー 大熊整美堂
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売部03(3563)1431

編集部03(3563)3664

振替 00120-4-34

Printed in Japan

ISBN4-12-500184-7 C0293

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

熊野古道殺人事件

内田康夫

C★NOVELS

中央公論社

挿画 福田隆義

目次

プロローグ

第一章 補陀落伝説

15

第二章 雛を抱く女

39

第三章 龍神の宿

69

第四章 滝尻王子に死す

89

第五章 那智勝浦

113

第六章 柩の船

141

第七章 行雲流水

167

エピローグ

213

熊野古道殺人事件

プロローグ

人間、いつどんな災難に襲われるか、分かったものではない。浅見光彦に災難の兆候が現れたのは、浅見がソアラのローンを完済したその日のことであった。

三年の支払い期間は、決して短いものではなかった。

あこがれのソアラに乗って、遠く日本中を旅した日々を思うと、血肉を分けた弟のような愛情すら、ソアラに感じないわけにいかない。

銀行に行つて、ローンの自動引き落としの最終

回が終了したことを確認したあと、浅見は花屋でバラを一輪買って、愛車の助手席に飾って帰路についた。

思い返せば、この助手席にも、ずいぶんいろいろな人を乗せたものである。

若く美しい女性も、思い出せないほどの数にのぼる。

しかし、助手席の常連ということになると、断然、母親の雪江未亡人——道路標識に対する知識など、まるでないくせに、スピードが速いの遅い

のと、ブツブツ文句ばかりが多い、最悪のナビゲーターだ。

蒲郡から伊良湖へ、雪江のお供を仰せつかったときは、最悪の旅であった。（『三州吉良殺人事件』参照）

そういえば、まったく気づかずに、殺人者を乗せて走ったこともある。（『佐渡伝説殺人事件』参照）

よくぞ無事で過ごしてきたものだ。スピード違反で捕まったことが三度あるほかには、事故もなく、故障もない。外国で日本車がよく売れるわけである。

さあ、明日からは、正真正銘、名実ともに一〇パーセントのマイカーとして駆使することができる——と、爽快な気分で帰宅した浅見を、不吉な電話が待っていた。

「坊ちゃま、ちょうどよかった。軽井沢のセンセ

からお電話が入ってますよ」

お手伝いの須美子嬢が、浅見に向けて、受話器をつきつけた。

まるで不潔なものを、一刻も早く手放してしまいたい——という手つきである。

須美子は「軽井沢のセンセ」こと、推理作家の内田康夫を嫌っている。浅見家の次男坊ちやまを、私立探偵もどきに引きずり込んだ張本人が、内田だと信じているのだ。

「いないって言うてくれればいいのに」

浅見は顔をしかめて、受話器を受け取った。

「おいおい、ひどいことを言いなさんな」

推理作家は、眠そうな声で言った。徹夜仕事をしたわけではない。運動不足からくるひどい低血圧で、いつも疲れた、眠い——と愚痴ばかり言っている。

「あ、聞こえましたか」

「聞こえるに決まってるでしょう」

「何か用ですか？」

「冷たい言い方だねえ。用があるから電話したんじゃないの」

「なるほど、きわめて論理的です。先生の作品もせてその程度、整合性があると、鑑賞にたえるのですが」

「何とでも言いたまえ。きょうはお願いの儀があるから、多少の悪口は聞き流すよ」

「あ、そうだったのですか。それは残念でした、お役に立てなくて」

「おいおい、そう言わないで、話だけでも聞いてくれたっていいだろう」

「どうせろくな話じゃないのでしょうか？ どこかへ車で運んでくれないかとか」

「当たった！」

内田は感動的な叫び声を発した。

「すごいね浅見ちゃん。さすがは名探偵だ。いや驚いたなあ」

「だめですよ、煽^{おだ}てたって。そういう、下手^{したて}に出た『お願いの儀』とくれば、それ以外に考えようがないじゃありませんか。ほかのことなら、どんな依頼でも、いつだって、恩着せがましい言い方をするんだから」

「そう言わないでさ。アゴアシ代ぐらいは出すから、頼むよ」

「アゴアシ代って、そんなに遠くまで行くんですか？」

「ああ、紀伊半島一周、三泊四日の旅だ。楽しそうじゃないの」

「呆れた、よく言いますよ。僕はそんなヒマ人じゃないんだから。飛行機か電車で行けばいいでしょう」

「驚いたなあ。飛行機嫌いの浅見ちゃんが、こと

もあろうに飛行機で行けとはねえ。僕に死ねって言いたいわけ？」

「じゃあ、電車はどうですか？」

「だめ、隣に誰が坐るか分からないもの」

「美人が坐るかもしれないですよ」

「保証がないな」

「だったら、タクシーで行けばいいじゃないですか。かりにも、先生はベストセラー作家の端くれでしょう」

「あ、きみはあれでしょう、僕がケチでこんなことを言うと思ってるのでしょうか？」

「ええ、そうですよ、ケチで言ってると思ってますよ」

「するどい！」

「何をばかなこと言っているんですか」

「いや、それは冗談だけだね。ほんとのことを言うと、この件については、きみにも責任の一端が

あるのだよ」

内田はいくぶん真面目な口調になった。この推理作家が、日頃、ホラとバカしか言わないのは、シャイな性格だからであって、根は善良な人格者であることは、浅見もよく知っている。

「えっ、僕に責任で、何のことですか？」

「いつかの、鳥取ひなおか雛送り殺人事件のことは、憶えているだろう？」

「ええ、もちろん忘れろったって、忘れられっこありませんよ」

東京新宿の花園神社と、鳥取市郊外の山間やまあいの町で起こった、奇妙な殺人事件のことは、これまでに浅見が扱った事件の中でも、ひととき印象の強いものであった。

「あの事件では、雛送行事が重要なキーワードになったのだが、その雛送行事の本家本元は和歌山県にある——というクレームのような手紙が

きた」

「クレームですか？」

「いや、クレームはオーバーだが、しかし、きみの無知を指摘したものであることは疑いようなものだな」

「僕の無知って、あの作品を書いたのは先生じゃないですか。僕はただ、事件簿をまとめて、先生に見せただけです」

「しかし、その際に和歌山県の難送りの話をしなかったのは、明らかにきみの怠慢であって、その責任から逃れることはできない」

「責任で……冗談じゃありませんよ。僕はそんなものがあるなんて知らなかったんだから、仕方がないじゃないですか」

「そうでしょうが、知らなかったのでしょうが。だから無知だというの。忘却とは忘れ去ること。無知とは知らないこと。知らなくては忘れ去るこ

ともできないとしたものだ」

「何をわけの分からないこと言ってるんですか。とにかく、僕には、そんな責任を押しつけられる筋合いはありませんよ」

「あ、こんどは筋論でくるわけ？ 浅見ちゃんと僕の仲はそういう無機質な関係だったわけか。ああ、いやだいやだ、甘かったねえ。僕は浅見ちゃんとは、不条理を乗り越えた、美しい友情の絆で結ばれているものとはばかり思っていたよ。じつに情けない……」

内田は万策尽きると、最後には泣き落としてくる。それが分かっているながら、浅見はいつも、術中に陥るのだ。ひょっとすると、内田には神のよいうな超能力でもあるのだろうか。

「分かりましたよ。それじゃ、とにかく話だけは聞きますよ。それにしたって、和歌山県の難送り見物で、三泊四日もかかるとは、どういうわけ

すか？」

「いや、その雛送り見物なら、一泊もすればいいのだが、じつは、その話と一緒に、きわめて興味深いニュースが舞い込んできた。なんと、熊野の海岸で、雛送りならぬ、人間送りの行事があるというのだよ」

「人間送り？」

「そう、鳥取の雛送りは、雛をサンダラボッチに乗せて川に流すのだったね」

「ええ、そうでした」

「和歌山の雛送りは、加太かたというところの海岸で、小舟に乗せた雛を沖へ流すのだそうだよ。ところが、熊野では、人間を棺桶くわんぼくみたいな小船に乗せて、沖合はるかに流したらしい」

「まさか……」

浅見は、また内田のジョークが始まった——と思つて、笑いを含んだ声で言った。

「と思うだろう。それが素人しやうとの浅ましき、無知の悲しさだね。補陀落渡海ふだらくとがといつて、九世紀なかばから十八世紀まで、実際に行なわれていたのだそうだ」

「ああ、補陀落渡海なら、言葉としては知ってますよ。しかし、それはあれでしょう、宗教的な一種の伝説みたいなお話としてあるにすぎないのでしょう？」

「もともとはそうだが、それを現実に行事としてやっていたというのだ」

「ほんとですか？」

「ああ、ほんとらしい。僕が言うんじゃないよ。」

T大学の教授先生が教えてくれたのだから、間違いない。間違いないどころか、それを、T大の学生どもが、実験的に再現しようとしているということだ」

「えっ、棺桶船で人間送りをやろうっていうんで

すか？」

「ああ、もちろん実験だから、本当に沖合はるかに流しちゃうわけじゃないのだろうが、それについて、ちょっと気になる話があるのだよ」

内田はもったいぶった口振りで声をひそめた。

ああ、また騙^{だま}される———と思いながら、浅見は受話器に耳を押し当てた。

第一章 補陀落伝説

1

二月なかば、T大教授の松岡正史が、「相談がある」と、軽井沢のぼくの家を訪ねてきたとき、ぼくはてつきり、若くて美しい夫人のことかと思つたのだつた。

大学は春休みの最中だからいいようなものの、ぼくのはうは遅れている書き下ろしと、雑誌の連載に追い掛けられていたから、あまり歓迎できる

状態ではなかった。

松岡は高校・大学を通じての友人で、家が近かつたせいもあつて、おたがいの自宅に行き来するほどの関係であつた。

大学では同じ文学部だが、松岡は何か感ずるところがあつたのか、仏教哲学を専攻した。坊さんにもなる気か——などと、冷やかしたりしたものだが、そうではなかったらしい。

元来は陽性の男だつたのだが、そのころから、妙に無口になって、ひたすら学究の徒に徹してい